

# 古代の祈り

## kodainoinori

「祈り」とは宗教現象の基本的要素として、原始宗教から現在の神道、仏教、キリスト教、イスラム教を問わず、いずれの宗教にも存在しています。この「祈り」は人と人を超えるもの(自然、神、仏)との対話であり、宗教的なコミュニケーションと考えられています。

遺跡から確認される「祈り」に関する遺構・遺物には、作った人々の心理と文化、社会による本来の目的が込められており、背景にある社会構造などと密接に係わっているとみられます。

この「祈り」に関する遺物には土器や土製品、石製品、木製品など様々な種類があり、その背景にある思いも多様であったと考えられます。このような遺物を使用する行為は「祭祀」と呼ばれ、この祭祀の目的には祈願、報告、感謝、慰霊、予祝、神意判断、清めなどがあるとされています。高知県内でも縄文時代から中世まで当時の人々の思いが込められた遺物が出土しています。

また、祭祀を行ったことが考古学的に立証できる遺跡を祭祀遺跡と呼んでおり、全国的には縄文時代から確認されています。高知県では具同中山遺跡群で古墳時代の大規模な河川に関連する祭祀跡が確認されており、当時の人々が行った水辺の祭祀の様相が明らかにされています。

今回の「古代の祈り」ではこれまで高知県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った遺跡から出土した「祈り」に関する遺物を展示し、背景にある当時の人々の思いなどを解説しています。

# 縄文

# 1

土偶と石棒は、縄文時代を通して作られた祭祀具の代表と考えられていましたが、弥生時代にも使用されていたことが明らかとなっています。石棒は男性主体の祭祀に使用され、土偶は女性主体の祭祀に使用されていたと考えられています。居徳遺跡群の土偶と石棒は縄文時代晩期のものですが、田村遺跡群の石棒は弥生時代前期のものです。縄文時代から弥生時代へは狩猟採集から本格的な水田稲作へと生活基盤が転換するほど大きく変化しま



土偶  
居徳遺跡群

すが、従来の祭りが引き続き行われ、精神的な価値観はそれほど変化していないと考えられます。このことは新しい弥生文化の担い手は縄文時代の人々であったことを示しています。弥生時代の初め頃には、縄文色の強い遺跡と弥生色の強い遺跡が併存しており、高知県でいえば前者は居徳遺跡群、後者は田村遺跡群です。また、土偶を使用した祈りは弥生時代になると分銅形土製品を用いた祈りへと引き継がれます。

# 弥生

# 2

弥生時代は、青銅祭器を使用した祭祀が代表的なものです。青銅祭器には銅矛、銅鐸、銅鏡、銅劍、銅戈<sup>どうか</sup>があります。高知県では、銅矛56本、銅鐸12口、銅鏡8面、銅劍10本、銅戈8本が発見されています。銅矛は主に仁淀川流域以西、銅鐸は物部川流域以東に分布し、高知平野では両者が交わ



銅矛  
天崎遺跡

ります。田村遺跡群では銅鐸、銅矛を含めた多種類の青銅祭器が持ち込まれ、求心力の強さを誇示しています。銅鐸は農耕祭祀に使用され、銅矛などの武器形のもの悪霊や外敵の鎮圧・防御のために使用されたと考えられています。これらの青銅祭器は一つのムラを超えた、より大きな地域集団の祭祀に使用され、集団

の結束を強固なものとし、繁栄を祈っていたのでしょう。

青銅祭器は一般的に埋納された状態で検出されることが多いのですが、西分増井遺跡群からは銅矛、銅鐸、銅戈が破片の状態で見つけられています。これらの青銅器片は祭器としての役割を終え埋納されることなく、壊されたと考えられます。西分増井遺跡群では鉄器を加工していた鍛冶の跡が見つけられており、鉄器だけでなく青銅器の加工も行っていた可能性が考えられます。また、このことは青銅器を使用した弥生時代的な祈りの終焉を示しています。



仿製鏡・銅矛  
西分増井遺跡群

## 赤色

赤色は血液の色であり、生命力、再生の意味が込められていました。弥生時代の赤色の顔料には、ベンガラと水銀朱があります。精製に使用した石器、顔料を入れた土器が見つけられています。出土する点数自体は少ないものの、多くの遺跡から確認されることから、各ムラごとで赤色顔料を使用した祭祀が行われていたと考えられます。高知県内では使用された状況がわかるものは出土していませんが、県外では葬送儀礼に使用されていますので、県内でもそのような使われ方が推測されます。



磨石  
伏原遺跡

## 土器

祈りに使用された土器には、祭祀専用特別に作ったものと日常生活で使用する土器を転用したものがあります。前者には絵画土器やミニチュア土器があります。絵画土器は、形は日常生活で使う土器と同じですが、焼く前に絵を描き、初めから祭祀に使う目的で作られます。田村遺跡群からは建物、魚、舟などが描かれた土器が出土し、勇前遺跡からはシカが描かれた土器が出土しています。建物は稲をおさめた神聖なものと考えられます。魚は飛び跳ねているような躍動感が感じられます。集落の前にひろがる太平洋で泳ぎ、跳ねる魚をモデルにしたのでしょうか。シカは地霊を象徴しています。絵画土器や絵画銅鐸に最も多く描かれているのはシカで、農耕儀礼と強く結びついていました。

ミニチュア土器は通常サイズの形態を忠実に模したものや象徴的に形作ったものがあります。日常生活で使用する土器を祈りのために使用する時には土器に孔を開けます。孔を開けることにより日常生活で使えなくし、祈り用の祭具としての新たな意味が付け加えられます。



甕  
伏原遺跡

古墳時代では、高知県内で発掘された主要な祭祀遺跡として、具同中山遺跡群、古津賀遺跡群、居徳遺跡群を紹介します。

具同中山遺跡群は、高知県西部の四万十市に位置する遺跡で、四万十川の支流である中筋川の左岸に立地しています。長年にわたる発掘調査のなかで遺物の集中する祭祀跡をはじめ数多くの遺構や遺物を確認しています。

発見された祭祀跡からは、土師器、須恵器をはじめとして、手づくね土器、碧玉製の勾玉、滑石製の勾玉や管玉・白玉、双孔円板、紡錘車、土製模造品の鏡・勾玉、土錘などを数多く確認しています。そのなかでも白玉などは現在までに数千点にのぼる数を発見しており、特徴的な状況を示しています。

同遺跡群は中筋川の自然堤防上に立地し、中筋川の増水や氾濫の影響を古くから多分に受けていた可能性が考えられます。そのため遺跡の周辺では、そうした河川に祈りを捧げた祭祀が古墳時代中期を中心に繰り返し行われたと考えられます。



甕  
具同中山遺跡群



祭祀遺物  
具同中山遺跡群



遺跡遠景  
具同中山遺跡群

古津賀遺跡群も高知県西部の四万十市に位置し、四万十川の支流である後川左岸の河川敷に立地しています。古津賀遺跡群でも具同中山遺跡群と同じように、古墳時代中期から後期にかけての祭祀跡が多数確認されています。

祭祀跡からは、土師器、須恵器に加え、手づくね土器、滑石製の勾玉や管玉・白玉、紡錘車、土製模造品の鏡や勾玉、鉄製品などが多数出土しています。発見された祭祀跡のなかには、四方に杭を配した方形区画のなかに手づくね土器を並

べ置く状況や須恵器の大甕を中心に置いて、その周囲に須恵器の杯身や高杯を配置した状況(SF10)などを確認しています。いずれの祭祀跡も河川を望む水辺のほとりに祭場を設け、河川の雄大な流れに祈りを捧げた祭祀の状況を彷彿させる内容といえます。そうした同遺跡群の近くには、当地域の盟主墳とされる古津賀古墳が位置しており、古津賀遺跡群との関係が注目されます。

居徳遺跡群は高知県中部にあたる土佐市高岡町に所在しており、仁淀川の右岸に立地する遺跡です。同遺跡群では、自然流路から古墳時代前期から中期にかけての遺物がまとまって出土しています。出土遺物は、多種類の土器に加え、特徴的な遺物として、小型器台や小型丸底埴、手づくね土器、土製模造品の鏡や勾玉、滑石製の勾玉、白玉・管玉、子持勾玉、双孔円板、鉄製品、火きり臼、木製弓、舟形木製品、櫛、桃核、獣骨などが確認されています。出土した遺物の状況からも居徳遺跡群での祭祀は、流路もしくはその周辺で行われたものと考えられます。また、出土遺物のなかには初期須恵器も含まれており渡来人や畿内



祭祀跡・SF10  
古津賀遺跡群



遺跡遠景  
居徳遺跡群



遺物出土状態  
居徳遺跡群

地域の人々との関係も注目されます。そうした遺物のなかに子持勾玉のような特徴的な遺物が含まれている点からみても、居徳遺跡群での祭祀に関わった首長層の存在がうかがわれます。

以上の各遺跡は、河川や自然流路などの水辺に関係した祭祀遺跡といえます。そこでは、生活や農耕に関わる河川や流路の恩恵や水の恵みへの感謝に対する祭祀や、時としては自然の脅威に対する備えとしての祭祀が行われ、そこでは古代人の祈りが幾度となく水辺に捧げられたと考えられます。

古代では律令制が施行されるとともに律令祭祀が国家的祭祀として採用され、国家仏教とともに中央だけではなく地方でも行われた時代といえます。縄文時代から古墳時代にかけての信仰を基礎として、国外から流入してきた新しい思想文化である仏教や道教などが合わさって古代社会における信仰形態が形成されたと考えられています。

高知県内から出土する古代の祭祀遺物はあまり多くありませんが、人形と齋串が徳王子前島遺跡や西鴨地遺跡から出土しています。人形の源流は中国大陸とみられ、漢代から唐代までの文献資料にも各事例がみられます。大陸における人形の主たる役割は死後の世界と神々の間に立ち、苦役を代替することにあると考えられています。大陸における人形の成立は、道教思想の成立と深く関係しており、日本の古代社会における人形も道教思想と深く結びついていたと考えられます。

日本における律令祭祀は、8世紀頃の宮廷儀礼を中心に制度化したと考えられます。また、『延喜式』などの文献資料にも散見されます。古代における人形の用途は、祓具として使用されたとみられ、人形の一つの使用方法としては「一撫一吻」といった形をとると考えられます。人形で我が身を一撫でし、続いて人形に息を吹きかけるといった行動が推測されており、一撫でして身の穢れを、一吹きして身中の病気や災いを人形に移したとみられます。そうした人形を水辺に流すことで祭祀の終わりをみたと考えられます。また、齋串は『万葉集』に詠まれた短歌や『出雲風土記』にみられる記述などから浄域を画するために立てたり、神への供物のしるしなどとして祭祀にあっては重要な役割を担っていたと考えられています。

自然流路などから出土する人形や齋串は、祭祀の終わりに廃棄された結果であると考えられ、その具体的な使用方法是今一つ判然としません。ただ、中世の絵巻物である『東北院職人尽歌合』には民間陰陽師の姿が描かれており、これらの人形と齋串は陰陽祓で使用されたものと考えられています。官衙関連遺跡等から出土する人形や齋串の実際の使用方法もそうした文献内容からの推測が可能といえます。

また、土佐国衙跡では掘方が方形を呈する掘立柱建物跡の四隅の柱穴から土師器杯が4点出土しており、結界の意図を持った地鎮遺構として考えられています。このような土器は「清浄の具」として位置づけられていたとみられ、地鎮儀礼においても銭貨など呪力を備えたものを載せる容器として用いられたと考えられています。このため、土器単独で地鎮儀礼が行われたとは考えにくく、そこになんらかのものが入れられ実際の儀礼に使用されたとみられます。土佐国衙跡の事例は、このような儀礼のあと、柱穴に埋納されたものと推測されます。



陰陽師  
東北院職人尽歌合

# 中世 5

中世は古代からの転換の中で、伝統的な信仰と祭祀が大きな変化を余儀なくされた時代であったと考えられています。中世に入って寺院のあり方が大きく変わり、民衆の間に仏教が浸透し始めると神仏習合が一段と深まっていき、この仏教と伝統的な諸信仰との接触の中で生まれた中世の信仰は現代に至る日本人の宗教観をよく現しているとみられています。

高知県高岡郡中土佐町に所在する西山城跡からは15世紀後半とみられる輪宝が墨書された白磁の皿が出土しています。輪宝は仏敵を倒す武器であることから、こうした輪宝を墨書した土器はその土地を結界するために四方に配置され、その内側を守り維持する役割を果たしていたと考えられています。興福寺大御堂の調査では堂の中心で検出された方形の土坑から槪に挿した輪宝が出土しており、地鎮作法の行われた事例として知られています。このように本来地鎮として行われていた祭祀が形を変化させ、西山城跡の事例のように土器に直接輪宝を描く方法に変わっていったとみられています。他には兜の前立とみられる銅製品と土師質土器皿、鉄銭が詰の南部でまとまって出土しています。何らかの祭祀に関連する遺物と考えられますが、他に事例がなくその意味は判然としません。

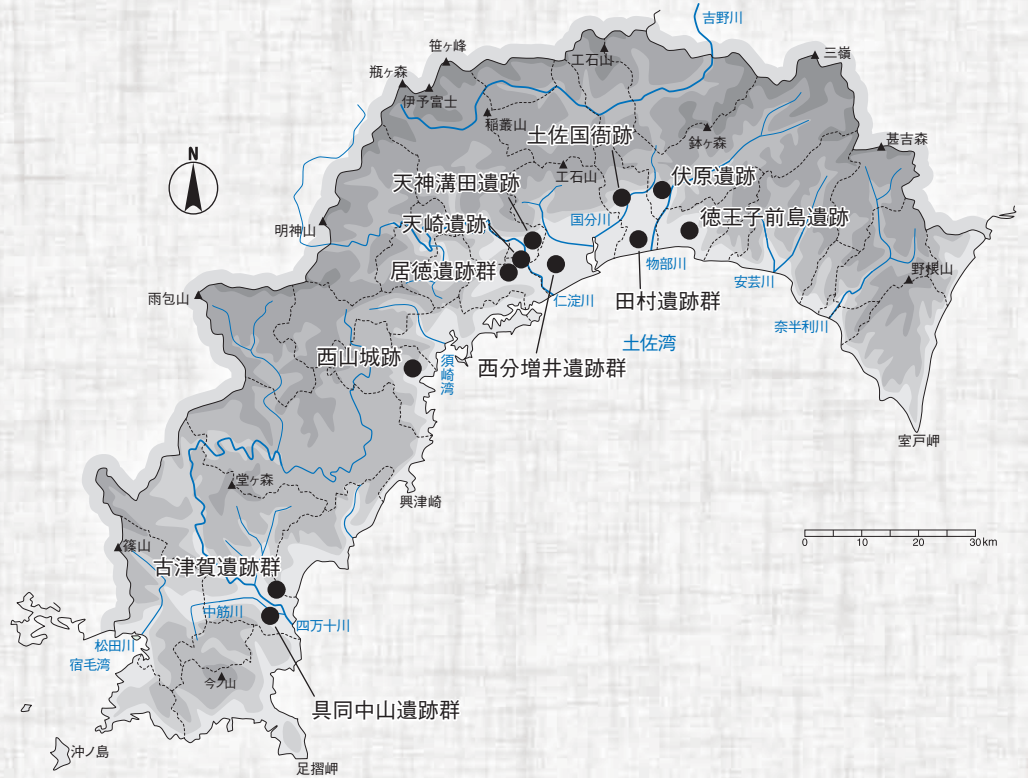
また、天神溝田遺跡では備前焼の壺に納められた和鏡と土師質土器の皿、銅銭が出土しています。この埋納された銅銭は備蓄銭もしくは境界の祭祀として埋納した銭貨、あるいは人々が開発行為を行う際に土地に捧げた呪術的な銭貨であったという考え方があります。後者の見方には寺や墓域、屋敷の中から出土すると土地の神からの土地の買得、それらが集落または郡域の周辺部から出土すると境界の呪術もしくは外界からの防御の呪術、遺跡や生活空間とは結びつかない場所から単独で出土すると何らかの土地用益あるいは開発に伴う呪術であった可能性が考えられています。また、福知山城跡では丹波焼の壺に和鏡の鏡面を上に向けて置き、その周囲に19本の竹筆を直立させて囲み、さらに小刀1本を壺の内面に立てかけて、壺の中には936枚の銭貨を納めて埋納していた事例が知られています。これは遺物の組成や埋納状況からみていわゆる備蓄銭ではなく、地鎮や祈願などを目的として埋納されたとみられています。天神溝田遺跡で確認されたものは集落の外れから単独で出土しており、上記の例からみると境界の呪術もしくは外界からの防御の呪術あるいは何らかの土地用益や開発に伴う呪術に用いられたものと推測されます。



和鏡  
天神溝田遺跡

## 西分増井遺跡群

高知市春野町に所在する遺跡で、縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されています。本遺跡では集落内の北端において弥生時代後期初頭から鍛冶炉や鍛冶関連遺構が検出され、青銅器の破砕片が多く出土していることから、青銅器の生産遺跡であった可能性が指摘されています。



掲載遺跡位置図

## 伏原遺跡

香美市土佐山田町に所在する遺跡で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されています。本遺跡の最盛期は弥生時代後期末から古墳時代初頭で、当該期の集落が検出され、他県からの搬入土器や大型の勾玉が出土しています。

## 土佐国衙跡

南国市比江に所在する遺跡で、長岡台地上に立地しています。本遺跡は昭和54年から高知県教育委員会や南国市教育委員会が発掘調査を行っており、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物跡などが検出されています。また、本遺跡からは古代だけではなく弥生時代や古墳時代の遺構・遺物も確認されています。

## 西山城跡

高岡郡中土佐町に所在する遺跡で、標高約70mの丘陵上に構築された山城です。堀切や堅堀を多用した防衛的性格の強い山城であり、遺構が良好に残っていました。本遺跡からは貿易陶磁器類がまとまって出土しており、県内初の<sup>しゃしひん</sup>奢侈品である青磁花瓶も確認されています。

## 天神溝田遺跡

吾川郡いの町に所在する遺跡で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されています。中世においては14世紀から15世紀前半と考えられる居住域が確認されており、15世紀後半以降には一部が墓域として利用されていたことが判明しています。また、近世では郷士もしくは庄屋が居住していたとみられる屋敷跡も検出されています。